



1990年代以降の中国に関連するセクシュアルマイノリティを扱う作品についての研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 女子美術大学 公開日: 2025-08-29 キーワード: 作成者: 兪, 暁凱 メールアドレス: 所属:
URL	https://joshihi.repo.nii.ac.jp/records/2000097

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.



1990年代以降の中国に関連する セクシュアルマイノリティを扱う作品 についての研究

▶ 兪 曉凱

1. はじめに

古代中国の歴史を遡ると、『韓非子』説難篇に記された「余桃之罪(余桃の罪)」¹⁾をはじめ男性同士(皇帝と廷臣)に関する物語が存在していた。しかし、近代化に伴うなかで同性関係は周縁へと追いやられ、1949年の中華人民共和国の成立以降、政府は性に関して厳しい態度を示すようになった。文化大革命以降も、1997年に全国人民代表大会での刑法改定により同性愛者の間の性行為が法的処罰の対象から外されるまで、同性愛は「流氓行為」とみなされていた²⁾。しかし、非犯罪化となったことで処罰される恐れはなくなったものの、同性関係に対する圧力がなくなったわけではなかった。1997年には「電影審査規定」が施行され、同性愛を含むセクシュアルマイノリティを扱った映画は検閲の対象として明文化された³⁾。実際に2016年2月には、Chai Ji Dan(柴雞蛋)のネット小説を原作に男子高校生同士の同性愛を描いたウェブドラマ『ハイロイン(上癮)』の13話以降が、中華人民共和国国家新聞出版広電総局により動画配信サイトから削除されるといった事態も見られた⁴⁾。近年でも、同性愛をはじめLGBTQ+をめぐる表現や制作は厳しく制限されており、検閲も強化されている。インターネットメディアでも、1990年代の初めにはグローバルコミュニティとしての側面があったが、近年ではSNSアカウントの取り締まりも厳しくなっている。こうした背景には、政府が打ち出した「社会主義核心価値観」⁵⁾や「正能量」⁶⁾といったスローガンが関係していると思われる。そのなかで于寧のリサーチにある通り、1990年代末以降、デジタルビデオカメラの普及に伴い盛んになったインディペンデント映画は検閲の対象とならなかったことで、インディペンデント・クィア映画が同性愛などを題材とする場となっていった。2001年には中国本土の北京で第一回中国同性愛映画祭(北京クィア映画祭)が開催され、LGBTQ+に関するトピックが公の場で示されるようになっていった⁷⁾。

アートの分野に目を転ずれば、中国本土とりわけ北京、上海には大規模な美術館やギャラリーがあるが、さまざまな異なるジャンルの展示がなされるなかで、LGBTQ+に

関する展覧会は開催されることがなかった。実際に現在の中国本土では、セクシュアルマイノリティに関する芸術や書籍への検閲がかなり厳しくなっており、LGBTQ+やセクシュアルマイノリティに関する作品の展示はほとんどできないと言っても過言ではない。こうした中国本土の現況に対し、台湾や香港では異なる状況を見せている。アジアで初めて法的に同性婚が認められた台湾では、2017年に台北当代美術館(MoCA Taipei)でサンプライド財団との共催のもと、「Spectrosynthesis(光・合作用)」をメインタイトルとしたLGBTQ+に関する展覧会が開催された⁸⁾。一方、現在も法的には同性婚は認めていないが、中国返還以前の1991年に同性愛が非犯罪化された香港でも、同展シリーズの3回目となる展覧会が開催された。これらの展覧会は、中国本土での展示が難しいアーティストたちの作品を紹介し、中国本土の現状も背景としながらアーティストが直面する困難や根深い価値観を浮き彫りにしている。本研究報告では「Spectrosynthesis」展シリーズにおいて展示された、男性同性愛を主題とする二人のアーティスト Xiyadie(西亜蝶)ならびに Ho Tam(譚浩)の作品について考察する。さらにこれら二人のアーティストのほかに、筆者と同世代の映画監督 Hao Zhou(周豪)の映画についても考察する。Hao Zhouの映画は、新しい世代の同性愛者が今まさに向き合わざるを得ない社会問題(形式結婚、代理母など)について、当事者の視点からクローズアップしている。中国本土、香港、台湾での同性愛をめぐる1990年代以降の社会状況を背景に、セクシュアルマイノリティが直面している自身のアイデンティティの悩み、抑圧などの問題をこれらの作品を通じて見ていく。

2. 「Spectrosynthesis」展の 男性同性愛を扱った作品の考察

2.1 「Spectrosynthesis」展について

「Spectrosynthesis」展が開催された背景には、2017年当時の同性愛をめぐる諸事情が関係している。2017年はイングランドとウェールズの地域において成人男性同士の性行

為が合法化されてから50年目の節目の年であった⁹⁾。同展の初回のカatalogにもある通り、それをきっかけにして、イギリスのテート・ブリテンやテート・ギャラリー、大英博物館ではデイヴィッド・ホックニー、ヴォルフガング・ティルマンズといったセクシュアルマイノリティのアーティストによる個展やLGBTQ+にまつわる回顧展が開催された¹⁰⁾。一方で台湾では、2017年5月24日に憲法裁判所に相当する司法院大法官會議が、同性婚を認めない民法の規定は違憲であるとの判決を下し、同性婚の法制化を2年以内に行うよう命じた¹¹⁾。こうした画期的な出来事や時代の流れに応じ、台北当代美術館は2017年9月9日から2017年11月5日まで、キュレーターのSean C.S. Hu (胡朝聖)のもと、アジアの公立美術館で初となるLGBTQをテーマにした「Spectrosynthesis — Asian LGBTQ Issues and Art Now」展を開催した。同展には台湾、中国本土、香港、シンガポール出身のアーティスト22人が出展した。その後「Spectrosynthesis」展はシリーズ化され、2年後の2019年11月23日から2020年3月1日まで、キュレーターのChatvichai Promadhattavediとアシスタント・キュレーターのAdulaya Hoontrakulにより、タイのバンコク芸術文化セ

ンターで東南アジアでの最大級のLGBTQ展となる「Spectrosynthesis II — Exposure of Tolerance: LGBTQ in Southeast Asia」展が開催された。次いで2022年12月24日から2023年4月10日にかけて、香港の大館当代美術館(Tai Kwun Contemporary)でキュレーターのInti GuerreroとChantal Wong(黄子欣)が共同で企画した「Myth Makers — Spectrosynthesis III」展(図1)が開催された。同展は、香港で初の大規模なLGBTQ+に関する展覧会であり、アジア各地とそのディアスポラから60人以上のアーティストによる作品が展示されたのみならず、クィア三人組による移動式図書館「Queer Reads Library」とのコラボレーションも実施され、クィア関連のジン(zine)も展示された。3回目となる展示では、「Myth Makers(神話製造者)」という全体テーマが掲げられ、アジアにおける神話や宗教、過去の出来事に見られる同性愛の物語を振り返りながら、当事者に関する身体性と政治的な歴史、クィアのビジョンと未来への可能性を思考させる展示内容となっている¹²⁾。本研究報告では「Spectrosynthesis」展シリーズのなかで、男性同性愛を扱ったXiyadie(西亜蝶)、Ho Tam(譚浩)の作品について考察する。

2.2 Xiyadie(西亜蝶)の作品について

1963年に中国陝西省の農村に生まれたXiyadieは高校を卒業した後、母の切り絵のやり方を見習い、2000年頃から中国の代表的な切り絵の様式を用いて(ただしサイズは普段中国の風俗で窓に貼り付けている切り絵よりもかなり大きい)、異性愛女性の結婚した悩みや苦しみ、自らのセクシュアリティの生きづらさ、男性同性愛者の間のラブストーリーなどを表現している。なお、アーティスト名として知られる「西亜蝶」という名前も、彼のセクシュアルマイノリティとしての特別な経験を反映している¹³⁾。Xiyadieは父親であり、農民であり、ゲイであり、出稼ぎ労働者であり、芸術家でもあるという立場や経験をもとに作品を制作しており、また陝西省で伝統的に好まれている花、葉、鳥などの図案をモチーフにオブジェを一個ずつ切り貼り、色付けする細かい手作業は、古くからあるジェンダーロール(性役割)に挑戦していると言える。

《Sew up(縫)》¹⁴⁾(1999)は「Spectrosynthesis — Asian LGBTQ Issues and Art Now」展に展示された。Xiyadieは登場する一人の人物の描写を通じて、彼の悩みや恋愛の経験を伝えている。画面を見ると向かって左側に壁、右側に

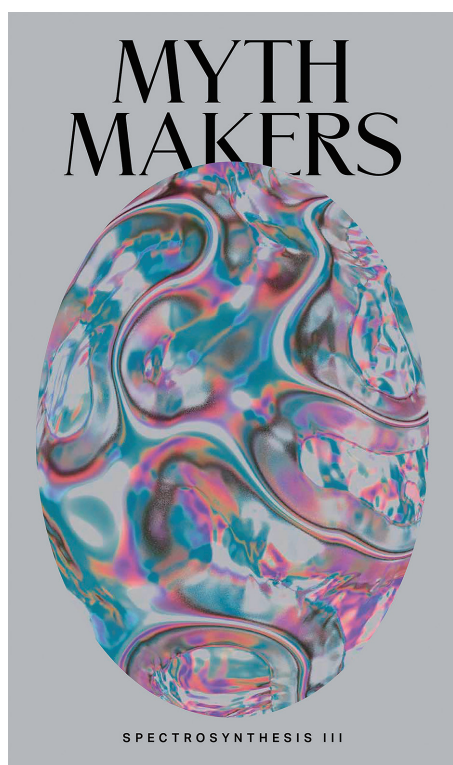


図1 「Myth Makers — Spectrosynthesis III展」リーフレット

扉があり、中国の伝統的な屋根を上部に、人物が床に置かれた剣の刃の上に座り、脱いだ黄色のアンダーウェアを右足からぶら下げ、壁に貼り付けた男性の写真を見ながら、赤い糸と白い針によって自らの男性器を縫い合わせている場面が表されている。Xiyadie は18歳の時に列車に乗ったところ、Minghui という男性の鉄道乗務員と出会い、互いに一目惚れをし、車内で情事をした経験があったというが、この逸話からも「中国鉄道部の制服」を着た写真の男性はMinghui であることをうかがわせる¹⁵⁾。なお、人物は裸体の状態で縫う作業をしているので、家にいる、つまり扉を出ていないということがわかる。扉は空間を区切る機能があるが、同時に「クローゼット(櫃子)の中にいる」ことも示唆しており、それはまだカミングアウトしていない事実を反映している¹⁶⁾。実際、男性同士の性愛について思いを馳せるなかで、異性愛しか認められていない社会であることは、Xiyadie を非常に悩ませ、登場人物に生殖器を縫い合わせさせたと考えられる。そのなかでこの作品では、赤い糸はたんに縁結びのイメージであるというよりもむしろ、血に染まった糸のイメージとなっている。彼は赤い糸を用いて自分の命を表し、「男大当婚、女大当嫁」¹⁷⁾といった伝統的な思想や不自由な社会に反抗した意味を与えている(尿道を縫っている)。さらに、欲望や誘惑の象徴とされる蛇が体内(左足)に入っており、精子のパターンとともに勃起した男性器は、Minghui への性愛を抑えられないさまを表している。一方、右手に持っている白い針は、その先端で中国伝統的な農村式の屋根を突き破っている(屋根を二つに分断している)。それは、社会や家族からの抑圧を脱却することや伝統的な思想からの解放を示している。屋根には鳥が止まっており、花も咲いているなど画面には牧歌的な雰囲気も漂うが、そのなかで人物は鋭い剣の刃に座り、危うさを漂わせながら、赤い糸で自身の性器を縫い合わせており、穏やかな背景とは相反する張り詰めた緊張感が感じ取れる。このような強烈な対比により、儒教思想における同性愛者の倫理的辛さや当時の社会において異性愛の女性と結婚するしかない無力感、好きな人への愛情を求めることができない心の痛みが表されている。このように《Sew up》では、同性愛の当事者としてXiyadie 自らのセクシュアルオリエンテーションと伝統的社会的価値観との葛藤が浮かびあがっている。

「Myth Makers — Spectrosynthesis III」展では、Xiyadie は3点の切り絵の作品(《Cut Sleeve (断袖)》《Crying Fish

(泣魚)》《Split Peach (分桃)》)を出展した。展示テーマである「Myth Makers (神話製造者)」のもと、中国の故事や神話にインスピレーションを受けて制作され、作品名はそれぞれ中国俗語の「断袖之癖」「龍陽泣魚」¹⁸⁾「余桃之罪」に由来している。そのうちの一点《Cut Sleeve (断袖)》(2022)では、画面は二人の人物と、花柄のシーツ、赤色の扉(壁)の三つの要素で構成されている。舞台はベッドであると考えられ、花柄の黒い背景はシーツであると推測できる。中国の故事にある通り、漢の哀帝が、自身の袖を下に寝ている董賢を起こさないように、ハサミで袖を切ろうとする場面が切り絵で表現されている。なお、哀帝が身に着けているローブに表された龍と鳳凰の柄は、それぞれ皇帝と皇后の象徴であり、対になることで夫婦和合を象徴するものでもあるため、皇后の存在が背後にあることを推察できる。ただし、通常、皇帝の服に龍と鳳凰と一緒に刺繍することはないため、こうしたローブの表れは、既婚(異性愛)の事実との葛藤を反映したものであるのかもしれない。

一方、董賢には髭はなく、体の輪郭線は柔らかな曲線で表されている。曲線は円滑、婀娜なイメージがあり、艶かしい寝相と相まって雄々しい男性のイメージと異なっている。そのなかで、董賢の男性器も艶やかに誇張して大きく表されており、同性愛を求める表れが強調されている。また、董賢の寝ている枕カバーに注目すると、右肩のあたりに五つドット状の表れを見ることができる。その輪郭の形は蓮の花托であり、ドットは蓮子であると思われる。中国では、「蓮子(lián zǐ)」の発音と「連子(lián zǐ)」の発音が同じなので、「子供」「子孫」の意味が含まれ、蓮の花托のなかに多くの蓮子があることで多くの子孫ができるという祝福の意味を兼ねている。実際、結婚した際、蓮子をその祝いとして新婚夫婦に送ることも多かった。こうした蓮子の表れにも、異性愛のもとで家庭を作るといった社会通念が反映されているが、董賢の右手を見るとそこに白い鳥の姿を見ることができる。Xiyadie 自身が「鳥は自由のイメージを代表(再現)している」¹⁹⁾と言うように、董賢は眠りながら鳥(自由)を掴んでいる。ただし、たんに自由を追い求めているのではない。鳥は中国の俗語において男性生殖器のニュアンスも含んでいるため²⁰⁾、ここには男性同士への性愛に対する思いも反映されている。

さらに作品の背景となっている赤い扉(壁)を見ると、Xiyadie がどのような視点、どのようなポジションでこの作品を制作したのかがうかがうことができる。扉(壁)は外側

と内側を空間的に区切る機能があり、パブリックとプライベートの境界を示すイメージでもある。Xiyadie は頻繁にこうした扉(壁)のイメージを用いている。《Cut Sleeve》では、扉のイメージは背景として存在しているので、哀帝と董賢が屋内にいるということがわかる。ただし手前側には、扉は表されていない。もし手前側に扉を描いたのならば、Xiyadie は第三者として屋内で起こった出来事を表したことになる。しかし、手前側に扉を描かないことで、彼は内側のポジションにいることを示唆している。つまり、彼もまたひとりの参加者として、目の前で発生した性愛の場面向き合っているのである。今の時代においても中国の農村部や僻地では古い思想を持っている人がまだ多く、中国本土の社会状況もあまり変わっていない。LGBTQ+の当事者は未だに世間の目を気にしながら、完全に理解されることのない心の痛みと無力感を抱えながら生きている。Xiyadie の作品はこうした中国本土の現況下で制作されている。

2.3 Ho Tam (譚浩) の作品について

中国の故事や神話をもとに中国の伝統的な切り絵様式を用いて作品を展開している Xiyadie に対し、Ho Tam は映像、絵画、本や雑誌の編集出版など多様なメディアを用い、個人のアイデンティティとその時代の関係性を国際的な場で探究している²¹⁾。彼は1962年に香港に生まれ、カナダとアメリカに留学し、現在はバンクーバーにある本屋「Ho Tam Press」の営業をしながら、アーティストとして活動している。また、1993年に初となるアーティストブック『The Yellow Pages』を刊行し、2010年以降にはより積極的に本や雑誌の制作に取り組んでいる²²⁾。「Spectrosynthesis — Asian LGBTQ Issues and Art Now」展と「Spectrosynthesis II — Exposure of Tolerance: LGBTQ in Southeast Asia」展には、季刊アーティストジャーナル『Hotam』を出展した。

『Hotam#1: A Brief History of Me』は Ho Tam の子供時代から成人期まで、成長に関わる写真を編集したものである。ここではアーティストの成長と、過去の経験やプライベートなストーリーを把握することができ、彼個人のクィアとしての成長史とともに時代の変遷を辿ることができる。『Hotam#5: Hot Asian Men』では、Ho Tam を含めた14人の作家がアジア男性にまつわる身体性やアイデンティティについて記し、雑誌『Oriental Guys』の表紙に掲載された写真やブルース・リーなどの写真などを交え、欧米にいるアジア人同性愛者のステータスに焦点を当てている。このよ

うに Ho Tam は印刷メディアを介し、セクシュアルマイノリティに関する話題を提供している。

一方で Ho Tam は1990年代から映像作品を制作し続けており、クィア・アーティストとしても知られてきた。映像作品《Miracles on 163rd》(2001)は、Ho Tam がニューヨーク滞在中に友人のクリスマスパーティーに参加して撮影したものである。室内のインテリアや装飾品、ダンス、会話、音楽が流れる様子などが「アーティストのさまよう視線」によって映し出されているが、パーティーに参加しているのはアフリカ系やラテン系アメリカ人がほとんどである²³⁾。そのなかで Ho Tam は「Chinese guys …」といった会話などを通じて、自らの境遇をパーティーの雰囲気と対比させている。「Myth Makers — Spectrosynthesis III」展では、映像作品《Season of the Boys》(1997)を出展した。この作品でもまた、白人と黒人の間に生きるアジア系アメリカ人に焦点が当てられている。実際、ニューヨークのチャイナタウンで暮らす中国系のアメリカ青少年たちがバスケットボールをしている場面に会った際に撮った映像をもとに、スローモーションの手法で彼らの身体(裸体)を映し出し、詩的なナレーションを付け加えた映像作品である。ムチムチな胸筋や腹筋をした少年がボトルを持ちながら歩くシーン、汗を拭くためにスリーブレスのTシャツを上げるシーン、小麦色の肌をした少年がシュートの準備をしているシーン、休みながらバスケットボールを眺めているシーン等々が映されているが、いずれも盗撮したかのような方法で撮影されたことで、生々しい生命力を持ち合わせた彼らの筋肉、汗、小麦色の肌を触れたいという心理的な興奮と、一方で彼らと直接話すことはできないという両義的な立場がうかがえる。ナレーションは Ho Tam によるものだが、それらを聴くと、エージングにともなう「少年の季節」への哀愁が語られている。

さらに《Season of the Boys》には、男性同性愛者だけが共感できる独特な視点が含まれている。ゲイの当事者は感受性が強く、自分の気になっている男性らしさを誰かに見いだしたら、相手を「鏡」のようにターゲットとする。よって青少年の姿を見たら、若さとともにその雄々しいイメージに惹かれる可能性が高く、自身もまた青少年たちと同じように運動し始めるしかないと考える。実際、男性らしさを持っている自分が「イケてる」タイプだと思われたら、優越感をもたらし、自分のことを好きな人が増えると考え人もいる²⁴⁾。よって Ho Tam の語るナレーションにあるよう

に、バスケットボールをしている青少年たちも含め誰もが歳を取るのだが、「少年の季節」は終わりなく繰り返されるだろう。しかし、青少年への羨ましさや欲望を反復しながらも、そこには、エージングに対する怖さや抵抗、孤独がたえず潜んでいる。Ho Tam はこのような男性同性愛者におけるフェティシズムの傾向を捉えながら、それを盗み見ることしかできないでいる眼差しそのものを表している。

しかし、それは同時に青少年の身体を「外見至上主義(ルッキズム)」や、いわゆる「ノンケっぽい」男性らしさのように消費される身体として捉えてしまっているのではないかという疑問も残る。実際、Ho Tam がこの作品を制作した1997年から現代に至るまで、ゲイが追い求める外見はあまり変容していない。近年ではゲイの人々はいわゆる「オネエのイメージ」を脱出しようとし、スポーツマンなどに「男性への欲望のプロトタイプ」を求めている。よってゲイの当事者にとって、ゲイカルチャーから自身が排除されないように、筋肉や髪型、肌の色などを意識して生きていくしかないと考える人が少なくない。現代ではマッチングアプリのように他者からの良い評価を求めて努力している異性愛者がいるが、ゲイカルチャーではそれが過剰に認識されている。Ho Tam 自身もインタビューでこの作品について「彼らを見ていると、興奮すると同時に憂鬱にもなりました。私は生と死、美と若さ、存在の儚さについて考えていました」と語るなかで、「ゲイ文化は、若さと美しさを重視しがちである」と述べており、「望む人」と「望まれる人」は基本的に同じ人物なので、私たちは自分自身を被害者に行っているだけで」と批判的な見解を示している²⁵⁾。

3. 映画監督 Hao Zhou (周豪) の映画について

Xiyadie や Ho Tam と比べると次世代にあたり、筆者よりもやや年上であるが、筆者と同じく中国において一人っ子政策が実施されていた時代(1979～2014)に育ったのが映画監督の Hao Zhou である。Hao Zhou は1992年に中国南川区に生まれ、重慶の大学に通った後にアメリカのアイオワ州に留学し、現在アメリカを拠点に活動している。大学在学中から重慶にいるセックスワーカーやセクシュアルマイノリティの当事者に関するビデオを撮影してきたが、それらの映像を編集し、2014年に長編映画『The Night』でデビューした。『The Night』は、その後演劇にも脚色され、『Yè』

という題名で2017年に東京芸術劇場で上演された²⁶⁾。現在もアイオワ・アーツ・カウンシルなどのサポートを受け、多くの映画作品を制作し続けている。

Hao Zhou は LGBTQ+ にまつわる問題に関心を持ちながら、日常で発生したリアルな出来事にインスピレーションを受けている。タイラー・ヒルと共同で制作し、学生アカデミー賞を受賞した短編映画『Frozen Out』(2021)では、Hao Zhou 自身がクィア当事者として出演している。中国を離れ、新しい場所で生活している Hao Zhou が南川区の故郷にいる妹に宛てて、フィルムレターのように自らのモノローグを伝えた作品である。故郷で撮影した映像とアイオワで撮影した映像を組み合わせ、移民としての立場や家族との別離への悲しさを示しながら、新しい場所で生きるセクシュアルマイノリティとしての自らの居場所やアイデンティティを思考した作品となっている。次いで、短編映画『Here, Hopefully』(2023)では、中国からアメリカに留学したノンバイナリーである Zee の物語が描かれている。看護専攻の大学4年生である Zee は、大学を卒業した後にアメリカで就労ビザを取得するために看護師ライセンスの試験準備をしていた。両親は Zee のセクシュアルオリエンテーションを知っており、それを尊重しているが、故郷の親戚や近隣の人々は Zee のアイデンティティを理解することができなかった。Zee は最終的にアメリカで就職することができなかったものの、カナダで仕事を心得、就労ビザも無事に取得する。『Here, Hopefully』でも、移民問題に加え、セクシャルマイノリティをめぐる母国(中国)との距離感が描かれている。

2022年に制作された短編映画『Future Flowers』では、近年中国で流行っている「形式結婚」²⁷⁾に焦点を当て、形式結婚をした二人と各自のパートナーとの関係やセクシュアルマイノリティが子供を作るといった問題が描かれている。生活が全く異なるレズビアン Ling とゲイの Du が一緒に暮らしているが、二人は子供を作るために「Future Flowers」というプログラムに取り組んでいる。「飲食習慣をどうやって保った方がいいのか」など日常的で細やかなことまで携帯アプリにより管理され、二人は約束した時間に打ち合わせ、今夜セックスするかどうかを相談しながら各自の生活を過ごしている。しかし、Ling と Du には各々セクシュアルマイノリティとしてのパートナーがいることもあり、このプログラムを実施するために4人の私生活と関係は掻き乱され、Ling と Du のパートナーへの罪悪感や無力感が浮か

びあがっている。中国では「花」は「子供」のメタファーであり、子供の成長する過程がまるで花が咲くことのように喻えられる。実際、中国の童謡に「我们的祖国是花园（私達の祖国は花園）」（作詞・田耳、作曲・王厚臣）という歌があるが、誰もが「我们的祖国是花园，花园的花朵真鲜艳（私達の祖国は花園、花園で花は鮮やかに）」という歌詞を歌うことができる。『Future Flowers』では、映画名に「Flower」が用いられていることはもちろん、映画のなかで「花朵（花）」という語が頻繁に取りあげられており、この言葉は「子供」の意味を表していると思われる。また、「花园（花園）」といった語も何度も出てくるが、この言葉も子宮や家庭、母国の意味を指していると思われる。

映画では、こうした形式結婚と子供を作るプログラムにデメリットが生じる点が描かれている。二人が子供を作る目標に関心を持ちすぎると、各自のパートナーにとっては、恋人からの愛情、性愛、暮らしの幸せといったものが感じられなくなり、また、私生活を犠牲にするために、心理的かつ肉体的に満足できずに揉め事に発展する可能性がある。その場合、携帯アプリの通知にある「あなたにストレスを感じさせる人を避ける」というアドバイスと矛盾することとなり、結果的にプログラムの実施が叶わなくなる。さらに、中国では家庭や子孫への意識が強く、子供を作れないと、両親や親戚からのプレッシャーや近隣からの口出しが絶えることがない。『Future Flowers』では、Ling と Du が家族のために自分のアイデンティティを裏切り、ゲイとレズビアンの間で（形式的に）結婚するといった他の国にとっては理解できない選択をせざるを得なかった状況が描かれている。

具体的に映画では、路上にある掲示板の前で二人が今夜プログラムを実施するかどうかを相談する場面がある（図2）。二人の真後ろの掲示板に書かれた「社会主义核心价值观」は、先に述べた通り LGBTQ+ の進展にとって大きな壁となっているが、二人が「社会主义核心价值观」の掲示板の前で相談をしていたことは、政府の推奨する（婚姻や家庭をめぐる）旧来の社会的価値観のなかで生きる矛盾や、政府が肯定する伝統的かつ一元的な考えと多様性に富んだ現実との間のギャップを浮かびあがらせている。そのなかで二人が離れる際に、Ling は方言で「不用紧张、我的屁没得那么可怕（緊張しないで、わたしのアソコは怖くないよ）」²⁸⁾ と言う。中国では「代理出産」は禁止されているが、形式結婚している夫婦のなかには「代理母」に頼むほかないといった人たちが少なくない。二人が社会的に子供を作らなけれ



図2 Hao Zhou 『Future Flowers』 2022年 10分33秒

ばならないプレッシャーや緊張を緩めるために、Ling が Du にこのように語りかける場面となっている。

ここで、Ling の言葉が「方言」である点にも注目したい。現在の中国では、政府により「マンダリン」という一元的な言語（公用語）で交流する政策が取られているが、Ling が方言で語ることは、セクシュアリティの多様性を求める志向と同じく、言語の多様性を求める反権威的なメッセージとなっている。実際、Ling と Du のアプリには効率的に子供を作るために「过度久坐会减少你生殖器的血液循环（座りすぎると生殖器への血流が減少します）」「日历显示现在是排卵高峰期（カレンダーは最適な排卵ピーク期を示しています）」などマンダリンによる通知が届き、二人はそれにたえず注意を払っている。現実を目を向けると、このような状況は同性愛者に限ったことではない。中国の異性愛者の夫婦の多くもこうした通知による規範を受けており、親世代が TikTok などの SNS を利用し、婚姻や出産、育児に関する内容を発信することで、家族の願望のプレッシャーによるストレスを感じ、人としてのアイデンティティさえも失ってしまう傾向にある。

Ling はこうしたアプリを削除することを試みるが、アプリの音声ガイドが「请确认你已知、你的决定会带来以下三个危害。我的决定会危害我的家庭、我的决定会危害我的祖先、我的决定会危害我的祖国（あなたの決定が以下の三つの危害をもたらすことを了解したのか。私の決定は私の家族に危害をもたらす、私の決定は私の祖先に危害をもたらす、私の決定は私の祖国に危害をもたらす）」と問いかける。映画では、実際に Ling がアプリを削除する場面は表されていない。あくまで Du のアプリが、「林小姐的未来状态目前

没法評価(彼女の将来の状況は現時点で評価できない)」と提示したことで、Ling がアプリを削除したことが推測されるだけである。しかし、映画が終わり、クレジットが流れる場面で、再びアプリの音声が流れる。それは Hao Zhou の描いた映画の世界(形式結婚や代理出産、アプリによる統制)が、これからの現実でも続いていくことを紛れもなく物語っている。

おわりに

本研究報告では、1990年代以降の中国本土、台湾、香港での同性愛をめぐる動向を背景に、そのなかで生きるセクシュアルマイノリティを扱った Xiyadie や Ho Tam の作品や、Hao Zhou の映画について考察した。中国は人口の多い国として知られるが、若い世代において、セクシュアルマイノリティを自認する割合は少なくない²⁹⁾。また2019年に同性婚が法制化された台湾でも、2021年4月末時点で5871組の同性カップルが結婚を登記しており、その数は決して少なくない³⁰⁾。香港でも2023年9月5日に香港終審法院(最高裁)が同性カップルの法的権利を何も保障していないことは違憲との判決を下し、香港政府に法的な枠組みを作るよう要請するといった動きが見られる³¹⁾。しかし、本研究で見えてきたように、中国本土では今なおセクシュアルマイノリティをめぐる表現や制作は制限され、SNSでの取り締まりも厳しくなっている。こうした中国本土の状況とも関連するかのようには、香港で開催された「Myth Makers — Spectrosynthesis III」展において、台湾系アメリカ人のシュー・リー・チェンが制作した作品(「3x3x6」シリーズ)が撤去されるといった事態も見られた³²⁾。

筆者も中国本土で生まれ、中国の文化や思想の影響を強く受けてきた。そのため、根深い伝統的な価値観や家族との葛藤に直面し、セクシュアルマイノリティとしてのアイデンティティに悩む経験をしてきた。こうした立場から、中国圏出身のアーティストによる作品を取りあげ、その紹介と分析を通じて、中国圏における文化的背景や家族観がLGBTQ+のアイデンティティ形成にどのような影響を与えているかを考察することは、中国のLGBTQ+に関する問題意識を広く向上させるという研究の意義がある。加えて、筆者自身もまた「結婚・育児観念」「東洋の男性らしさ」に関する問題に向き合うなかで、ひとりの表現者として映像やインスタレーションなどの手法を用いて作品を制作し

ている。今後も「結婚・育児観念」がLGBTQ+コミュニティに与える影響やLGBTQ+の多様なあり方による「婚姻関係・育児観念」の変化、また西洋の男性が抱く「東洋の男性らしさ」のイメージなど、依然としてセクシュアルマイノリティをめぐる問題が存在することに焦点を当てながら、アートの役割を通じ、その未来への取り組みを探究していきたい。

註

- 1) 君主の寵愛は気まぐれで頼みがたいことをいうたとえ(日本国語大辞典第二版編集委員会、小学館国語辞典編集部編『日本国語大辞典 第二版 第十三巻』小学館、2002年、654頁)。「余桃」は食べ残した桃を意味するが、寵愛のあった頃は「分桃(桃を分ける)」であったとして「男性同士の愛」の逸話と解釈されている。
- 2) 中国における同性愛の歴史や差別については、スーザン・マン『性からよむ中国史——男女隔離・纏足・同性愛』(秋山洋子、板橋暁子、大橋史恵訳、平凡社、2015年)、田文俊「中国における男性同性愛者をめぐる差別—当事者の人権意識を中心に—」(『言語・地域文化研究』第29号、東京外国語大学大学院、2023年、325–340頁)などを参照。「流氓」は社会を乱す無法者を意味し、「流氓行為」は広範な反社会的行為の総称である。
- 3) 広播電影電視部令(第22号)により1997年1月16日施行。于寧「1990年代の中国本土における当事者による同性愛言説の形成——呉春生をはじめとする運動家の活動を中心に」(『女性学』第29号、日本女性学会、2022年、111頁を参照)。
- 4) Lilian Lin and Chang Chen, “China’s Censors Take Another Gay-Themed Web Drama Offline,” *The Wall Street Journal*, Feb. 24, 2016, <https://www.wsj.com/articles/BL-CJB-28737> [2024年9月2日閲覧]。
- 5) 2012年に中国共産党が掲げたスローガン。「富強」「民主」「文明」「和諧」「自由」「平等」「公正」「法治」「愛国」「敬業」「誠信」「友善」といった12単語、24文字からなる。習近平政権以降、公共空間の至る場所に掲示されている(荒井利明「社会主義核心的価値観」を押付ける習主席、しかし国民が求めるのは「平等」「民主」「公正」『産経ニュース』2015年4月7日、<https://www.sankei.com/article/20150407-N5J26VCRNLNKTDIC3WYGMDF5XXI/> [2024年9月2日閲覧]を参照)。
- 6) 直訳すると「正(ポジティブ)のエネルギー」だが、人の活力を前向きに向かわせるよう啓発する言葉。林毅は「習近平国家主席就任前後から使われだした「正能量」という言葉も、セクシュアルマイノリティにとって大きな壁だ」と指摘し、「同性愛も不倫などと並んで「非正常な性的関係や行為」として放送禁止の対象になった」と述べている

- (林毅「ゲイと共産党と中国の未来」『ニューズウィーク日本版』2020年8月5日、<https://www.newsweekjapan.jp/stories/woman/2020/08/post-427.php> [2024年9月2日閲覧]を参照)。
- 7) 中国本土におけるインディペンデント・クィア映画をめぐる状況については、于寧「中国本土におけるインディペンデント・クィア映画史の再構築——新しい分類法を用いて」(『ジェンダー研究』第25号、お茶の水女子大学ジェンダー研究所、2022年、197-217頁)を参照。
 - 8) サンプライド財団(Sunpride Foundation)は2014年にパトリック・サンにより香港に設立された。LGBTQ+に関わる作品の収蔵や展示を通じてアジアにおけるLGBTQ+と平等の推進活動に従事している。タイトルである「Spectrosynthesis(光・合作用)」の由来も同財団と関連がある。「Sun(太陽)」は中国語の「光」にあたるが、分光器によりレインボーを見ることができると言える。言うまでもなくレインボーはLGBTQ+を象徴する色である。また光は植物や動物の成長において欠かせず、暗闇の社会に光を当てより明るい社会を迎えるといった意味合いも含んでいる(「Spectrosynthesis — Asian LGBTQ Issues and Art Now」展覧会カタログ01、台北当代芸術館、2017年、11頁、16-17頁を参照)。
 - 9) イングランドとウェールズでは成人男性間の性交渉について1533年のバガリー法以降犯罪として規定されたが、1967年に合法化された。
 - 10) テート・ブリテンでは2017年2月9日から5月29日にかけて「デイヴィッド・ホックニー」展、2017年4月5日から10月1日にかけて「Queer British Art 1861-1967」展が開催された。テート・ギャラリーでは2017年2月15日から6月11日にかけて「ヴォルフガング・ティルマンス」展が開催、大英博物館では2017年5月11日から10月15日にかけて「Desire, love, identity: exploring LGBTQ histories」展が開催された(「Spectrosynthesis — Asian LGBTQ Issues and Art Now」展覧会カタログ01、10-11頁、16頁、18頁を参照)。
 - 11) 台湾立法院(国会)は2019年5月17日、同性カップルによる婚姻登記を認める「司法院积字第748号解释施行法」を可決し、台湾はアジアで初めて同性婚合法化を実現した。
 - 12) 「Myth Makers — Spectrosynthesis III」展覧会カタログ、大館当代美術館、2023年、4-5頁を参照。
 - 13) 「西亜蝶」は「シベリア(西比利亜)の蝶」を意味する。凍りつくような冬を耐え、春の陽光で再び蝶が羽ばたくことができるというシベリアの伝説に由来するが、アーティストの現在の境遇とその未来を示している(「Spectrosynthesis — Asian LGBTQ Issues and Art Now」展覧会カタログ01、64頁を参照。アーティストの略歴についても同カタログを参照)。
 - 14) 英語名は展示により異なるが、「Spectrosynthesis — Asian LGBTQ Issues and Art Now」展での表記に倣った。
 - 15) 「Myth Makers — Spectrosynthesis III」展覧会カタログ、34-35頁を参照。また、キュレーターのRosario Güiraldesも「列車の乗務員の写真」がMinghuiであることに言及している(Rosario Güiraldes「Xiyadie」『LA BIENNALE DI VENEZIA』<https://www.labiennale.org/en/art/2024/nucleo-contemporaneo/xiyadie> [2024年11月25日閲覧]を参照)。
 - 16) 「Spectrosynthesis — Asian LGBTQ Issues and Art Now」展覧会カタログ01、64頁を参照。同カタログでは、Xiyadieの「Door」シリーズについて言及するなかで扉のイメージが「クローゼットの中にいる(in the closet)」という考え方を示唆すると述べられているが、『Sew up(縫)』にも同様に扉のイメージが描写されている。なおLGBTQ+用語では、「カミングアウトしていない人、またそういう状態のことを「クローゼット」と言う(無記名「LGBTQ用語解説クローゼット」『Magazine for LGBTQ+ Ally - PRIDE JAPAN』https://www.outjapan.co.jp/pride_japan/glossary/ka/1.html [2024年11月25日閲覧]を参照)。
 - 17) 男性も女性も適齢になれば結婚すべきである(北京商務印書館、小学館共同編集『中日辞典』小学館、1992年、994頁)。
 - 18) 魏の安釐王と寵愛された龍陽君との間で釣った魚をめぐるなされたやり取りで、「断袖」「分桃」と同様(皇帝と廷臣との間の「男性同士の愛」の逸話として知られる)。
 - 19) 「Myth Makers — Spectrosynthesis III」展覧会カタログ、34-35頁を参照。
 - 20) 鳥(diào) = 屌(diào: 男性器の俗語)(北京商務印書館、小学館共同編集『中日辞典』小学館、1992年、325頁を参照)。
 - 21) 「Myth Makers — Spectrosynthesis III」展覧会カタログ、142-143頁を参照。
 - 22) Ho Tam「Bookwork & Publishing」『Ho Tam(HP)』<https://ho-tam.com/bookwork.html> [2024年9月2日閲覧]。
 - 23) Ho Tam「Projection / Installation」『Ho Tam(HP)』<http://ho-tam.com/vidofilm.html> [2024年9月2日閲覧]。
 - 24) 木谷幸広、河口和也「マッチングアプリ「9monsters ナインモンスターズ」におけるゲイの身体変容—リアル・スペース「ゲイバー」への影響—」『広島修大論集』第61巻第2号、広島修道大学ひろしま未来協創センター、2021年、3頁を参照。
 - 25) Ho Tam「TITLE: Seasons of the Boys - An Interview with Ho Tam BY MIKE HOOLBOOM」『Ho Tam(HP)』<https://www.ho-tam.com/mike-hoolboom.html> [2024年11月25日閲覧]。
 - 26) Hao Zhouの経歴についてはHao Zhou Studio HP (<https://www.haozhoustudio.com/>) [2024年9月2日閲覧]を参照。
 - 27) ゲイとレズビアンが形式的に婚姻届を提出し、仮面夫婦となることを指す。トラブルも伴うため、結婚前に子供を作るかどうかといった規約を交わすことも少なくない。(川原田健雄「親のため」同性愛、苦渋の偽装結婚 偏見根強い中国 海外で代理出産も』『西日本新聞 me』2020年8月24日、<https://www.nishinippon.co.jp/item/n/638160/>

[2024年9月2日閲覧]を参照)。

- 28) 「尿 (bi)」は女性生殖器の俗称。(北京商務印書館、小学館共同編集『中日辞典』小学館、1992年、73頁を参照)。
- 29) 中国家族計画協会、中国青年ネットワーク、清華大学公衆衛生研究センターが2019年11月から2020年2月にかけて共同で実施したアンケート調査によると、中国の大学生の約23%がセクシュアルマイノリティであると自認していることがわかった(無記名「中国の大学生の約23%が「異性愛者ではない」と自認していることが明らかに」『Magazine for LGBTQ+Ally - PRIDE JAPAN』2020年5月21日、https://www.outjapan.co.jp/pride_japan/news/2020/5/23.html [2024年9月2日閲覧])。
- 30) ジャン＝ドゥニ・マルクス、中井綾、糸井範之「「同性婚」めぐる日本の行方は？ フランスや台湾はどのような経緯で実現したのか」『LGBTとアライのための法律家ネットワーク』2023年5月30日、<http://lanjapan.org/lgbtinfo/2214> [2024年9月2日閲覧]。
- 31) 無記名「香港最高裁が、同性カップルの権利を保障する法的枠組を作るよう香港政府に要請しました」『Magazine for LGBTQ+Ally - PRIDE JAPAN』2023年9月5日、https://www.outjapan.co.jp/pride_japan/news/2023/09/6.html [2024年9月2日閲覧]。
- 32) フランチェスカ・エイトン(清水玲奈訳)「厳しさを増す中国の検閲——香港の大規模なLGBTQ+アート展から作品を撤去」『ARTnews JAPAN』2023年3月20日、<https://artnewsjapan.com/article/842> [2024年9月2日閲覧]を参照(Francesca Aton, “One Artwork Censored in Major LGBTQ+ Exhibition in Hong Kong,” ARTnews, March 13, 2023, <https://www.artnews.com/art-news/news/artwork-censored-in-spectrosynthesis-lgbtq-exhibition-hong-kong-1234660733/>)。「露骨な性的表現」が撤去の理由とされるが、「既存の性やジェンダーの慣行に従わない10人の服役囚の物語」に焦点が当てられており、欧米メディアは「中国の特別行政区での検閲がエスカレートしている」との見方を示している。

図版出拠

- 図1 大館当代美術館 (Tai Kwun Contemporary) HP より
- 図2 Hao Zhou 提供

A Study of Artworks Dealing with Sexual Minorities Related to China Since the 1990s

YU Xiaokai

In China, a 1997 revision of the Criminal Law removed the classification of sexual intercourse between homosexuals as criminal activity. However, while the fear of being punished for such acts disappeared, the pressure on same-sex relationships did not. It is no exaggeration to say that it is almost impossible to exhibit artworks on sexual minorities in mainland China. However, Taiwan held an LGBTQ+ exhibition titled “Spectrosynthesis” at the Museum of Contemporary Art, Taipei (MoCA Taipei) in 2017, and the third exhibition in the same series was held at Tai Kwun Contemporary in Hong Kong. These exhibitions showcased works by artists whose creations were difficult to exhibit in mainland China and highlighted the challenges and deep-rooted values faced by sexual minorities. This research report discusses the artworks of two artists, Xiyadie and Ho Tam, whose works about male homosexuality were exhibited in the “Spectrosynthesis” series. In addition to these two artists, the works of filmmaker Hao Zhou, who is of a similar generation to the author, are also discussed. Hao Zhou's films take a close look at the social issues (formal marriage, surrogate mothers, etc.) that the new generation of homosexuals must now face, from the perspective of those involved. Through these artworks, I analyzed the identity struggles, oppression, and other challenges faced by sexual minorities in the context of the social conditions surrounding homosexuality in mainland China, Hong Kong, and Taiwan since the 1990s.